研究ノート・中国西域の中庭型建築

越野　武

今春『風と大地と　世界建築老眼遊記』（新宿書房）という著書を刊行させていただいた。タイトル通り、ここ数年続けてきた旅の途々で目にした各地の建築について雑文を綴ったものである。あとがきにも記したが、紀行文ともつかず建築論としても中途半端なものになったが、幸いにも本学の出版助成を受けて、陽の目をみることができた。

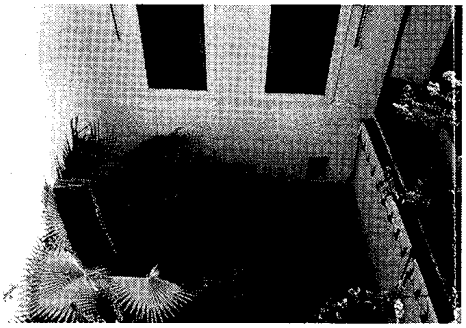
著書のタイトルは「世界建築」と大げさなことになったが、取りあげた地域でいえば、中国南部（雲南、福建省など）、インドネシア、インド西部、バルト海周辺（ロシア北西部、フィンランド、エストニアなど）、トルコ中央部、南イタリア、ジブラルタル海峡の南北（モロッコとアンダルシア）といったところである。一応ユー

ラシア大陸を東から西へと見わたしたことになるが、もとより書くべき対象は際限のないことで、わずかの散点を恣意的に選んだまでである。ただ、実際に旅で訪れてもおり、テーマとしても強い関心を抱いていながら割愛したところがある。表題した「中国西域の中庭型建築」がそのひとつである。さしずめ続篇に期す、と広言したいところだが、まず覚つかぬことではある。小報は割愛分の残欠メモであり、かりにも僥倖にめぐまれるようであれば、その準備ノートといったものになろうか。

中庭型建築[*1]について

中庭型住宅については、著書『風と大地と』でも述べており、中国西域の見聞にも少しだがふれているが、まずその要点を記しておこう。

住宅（建築）を敷地との関係でいえば、建物の外周に庭・空地をもつタイプと、外周には空地をもたず、家屋の内側に庭・空地を囲いこむタイプに二分される。[*2] もちろん後者がここでいう中庭型住宅（建築）である。われわれ現代日本人にはなじみが薄く、ちょっと想像がむずかしいようだが、[*3] 煉瓦あるいは石の組積造外周壁を隣家と共有して廻らし、家のまわりに空地を残さないから、当然各室の窓や出入口といった開口部は原則としてすべて中庭に向けられる。隣家間の空地を残さないと



マラケシュ市（モロッコ）ムーサン街区19番
住宅の中庭（2004年撮影）

いうのがポイントで、そのために高密度な居住が可能になるのである。

実際、都市住宅の最も単純かつ基本的な条件である居住密度を検討してみると、中庭型住宅の優位性は容易に確認することができる。二階建て程度の低層住居で、現今の中高層都市住居に匹敵する高密度を実現することが可能なのである。陣内秀信によれば、バグダードの「伝統的な地区では、ヘクタール当たり一〇〇〇人もの高密度でありながら、優れた住環境を実現していた」という。[*4]『風と大地と』ではモロッコのマラケシュ旧市街の住居地について、ヘクタール当たり六〇戸ほどかと簡単な推計をしている。[*5]

中庭型住宅が生まれる背景はもちろんいろいろと考えられるが、例えば右の陣内論考は、イスラーム圏を主としてその「必然性」を、土地利用の効率性に加えて、防御性、プライバシーの確保、環境装置としての利点、さらに階級制を露わにしない社会的な仕組みをあげて論じている。[*6]

中庭型住宅はきわめて普遍的なもので、歴史的にいえば都市住宅のほとんど唯一の形式としたくなるほどである。唯一でないのは、古代ローマ市などで高層タイプの都市住宅が成立しており、また中世以降の北ヨーロッパなどで「街路型」といわれるタイプの都市住宅が発達しているからである。後者は、とらえ方によっては東南アジア、日本などに共通するといえるかもしれない。にもかかわらず「唯一の都

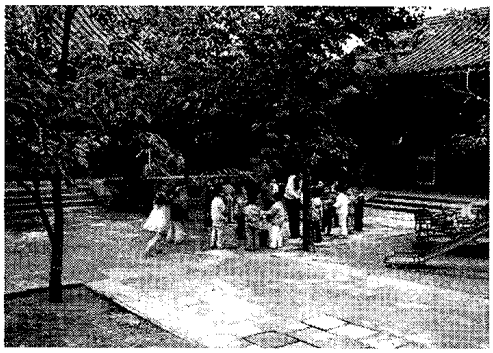
市住宅タイプ」といいたくなるのは、ユーラシア大陸中緯度帯を東西に横断し、北アフリカ・地中海沿岸部にいたる広大な地帯に分布し、[*7] かつこの地帯が古代都市文明の成立、発展した地に重なるからである。

ユーラシア大陸の中緯度・中庭型住宅分布帯の西方では、まず古代ローマ期のポンペイ遺跡が想起されよう。ここでは「ドムス」と呼ばれる、高度に発達した形式の中庭型大邸宅がよく知られている。大規模な邸宅では前面のアトリウムと奥のペリスティリウム、二つの中庭を備えるのが定式である。アラブ・イスラーム圏との大きな違いは、中心軸を揃えた明晰なプラン構成と相対的な開放性で、これは都市空間全体でも共通しており、アラブ都市の迷路性は希薄である。

これも周知のことだが、中庭型住宅形式は古代ローマに先立ち、古代メソポタミア文明期にさかのぼる。シュメール人の都市ウルの中庭型住宅街区（前一八〇〇年頃）がよく知られているが、非常に発達した姿から推して起源はもっと古く、すくなくとも第三千年紀中葉の初期王朝期にまではさかのぼるはずである。

アラブ・イスラーム圏は、こうした古代中近東域の伝統をうけて、いわば中庭型住宅の本場といった観を呈している。前出陣内の論考は、「東のイランから西端のモロッコまで」のイスラーム世界の「人類が築き上げた住宅文化の中でも、特筆すべきものの一つである」中庭型住宅を扱ったものであるし、陣内・新井編『イスラー

北京市西城区西四北大街「胡同（フートン）」（1986年撮影）

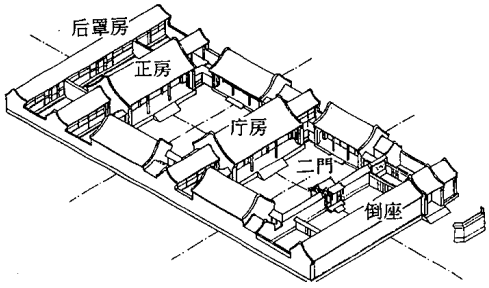

北京市西城区の四合院の主院子（1986年撮影）

ム世界の都市空間』全体では、さらに東の中国新疆カシュガルの事例までがとりあげられている。[*8]

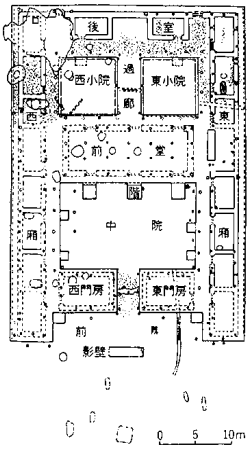
中国の四合院住宅

一方、中庭型住宅分布帯の東側、中国の「四合院」[*9]もまぎれもない中庭型住宅として知られている。四合院住宅は北京市「胡同（フートン）」[*10]のものが著名なので、その概要を記しておく。平面は中庭「院子」を中心としてその四方に堂屋（房）を配するのを基本とする。南正面を原則とするので、その方位でいうと、街路（胡同）側正面向かって右手、東南隅[*11]の大門を入ると東西に細長い「前院」で、以下は南北中心軸を通した厳格な左右対称に配置される。前院中央に「二門」―その華麗な装飾を施したものを「垂花門」という―があって、入った所が「院子」、その奥に正対南面して主屋「正房」、左右に副屋「廂房」をおく。各房の前面にはオープンギャラリー「走廊」が設けられ、院子を一周する。以上が基本単位だが、北京のものは一般に規模が大きく、この単位を二つ、場合によっては三つ以上も縦に連ねて、奥行きの深い邸宅を構成するのである。[*12]

四合院住宅は、漢族民居の基本形とされ、[*13]その起源も古く殷周時代にさかのぼる



四合院の概念図（陣内秀信他『北京—都市空間を読む』（鹿島出版会、1998. 2））



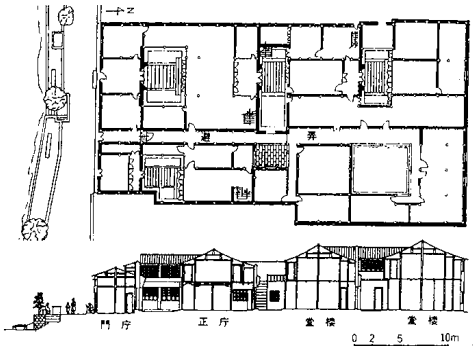
周原鳳雛宗廟遺址平面図（陝西省岐山県鳳雛村、西周初期 前1100年頃）（日本建築学会編『東洋建築史図集』（彰国社、1995））

とされる。河南省偃師県二里頭の殷代前期（前一八〇〇年頃）宮殿跡二例は、基壇付き宮殿が中庭内に独立して建つ配置であるが、中庭周壁は回廊形式をとっていて、中庭型邸宅成立の前形式と位置づけられよう。これに対し、陝西省岐山県鳳雛村の西周初期（前一一〇〇年頃）の宮殿ないし宗廟遺跡は、はっきりと整った中庭形式の建築ということができる。さらに漢代には、画像石（磚）、家屋明器によって、「（三合院や）四合院形式が漢族の住居建築として定着しはじめた」ことが推考されている。[*14]

北京の大規模四合院邸宅は、ちょうど西方、ポンペイの中庭型邸宅「ドムス」に対応するものであろう。帝都北京には、都市住宅といっても特に敷地の大きな邸宅が建てられたのだが、もちろん中国でも中庭型住宅はそのような大邸宅ばかりでなく、もっと小規模な住居形式としても広く建てられており、その省略形式である「三合院」や「二合院」とされる場合も多い。

管見したものでは、雲南省大理県近郊の坡頭鎮、喜州鎮などで拝見した住居が「三枋一照壁」といわれる三合院形式だった。[*15] ここでは東西軸が卓越しており、東・洱海湖岸側を正面とし、西・蒼山側を背面とする。東正面側を房屋ではなく照壁とし、その脇から入るのである。数軒を訪ねただけだが、いずれも単院形式で、したがって敷地は正方形に近く、整った三合院として定式化しているようにみえた。漢族で

雲南省大理県喜州鎮の「三枋一照壁」住宅　左が正面照壁、右が主房（2001年撮影）



江蘇州同里鎮の四合院住宅平面図と断面図（高村雅彦『中国江南の都市とくらし　水のまちの環境形成』（山川出版社、2000））

はなく白族（ペー）の住居であるが、一応漢文化の影響下に成立したと理解されているようである。ただし地方的な独自の中庭型住宅として、もう少し丁寧な位置づけがいるのかもしれない。[*16]

長江以南のいわゆる江南地方の中庭型住宅については、茂木計一郎（安徽省南部の徽州など）[*17]、高村雅彦（江蘇省蘇州周辺など）[*18]の調査が報告されている。未見なので高村が華北四合院と比較した要約を引いておくと、高温多湿の江南では「中庭側の開口部が比較的多く、しかも狭小な中庭ながらも通風をよくするため、扉などの建具は基本的に取り外しが可能なものばかりである。二階建てが圧倒的に多く、そのうえ間口が狭く後方に長い敷地に住宅をつくる傾向が強く見られる」としていた。[*19]

北京四合院は平屋であることもあって、アラブ・イスラーム圏のものと較べると、その空間構成はきわめて緩やかで広闊な印象を受ける。中庭に立ったときの視野の広がりがそうであるが、そればかりでなく、隅部がルーズに抜けていくような空間や、隣家間の境界へ雨水を流すような勾配屋根のかけかたは、一般的に高密化が進めば許容できない処理手法といってよいであろう。

華南のように、平屋でなく二階建てとされる場合は、中庭空間の緊密度はずっと高くなる。ここでは中庭を「天井（ティエンチン）」と呼称するようだが、[*20]この語には「院子」と

少し違ったニュアンスがこめられていないだろうか。「天井（ティエンチン）」は井戸底のような窪みの上に切りとられたように見える天空、建築では天窓に近いものをさしていうのが原義であろうから、同じ中庭でも「天井」であれば、まわりの建物が二階建て以上に高く、見上げるような空間になっていると考えられる。換言すれば、高密に集積した中庭型住宅だということである。

西安回族の中庭型建築

以上、中庭型住宅がユーラシア大陸の東と西に分布することをみてきた。ここまでは双方とも研究が蓄積され、世界の建築や住宅を通覧しようとする者にとっては、いわば常識とされていることである。

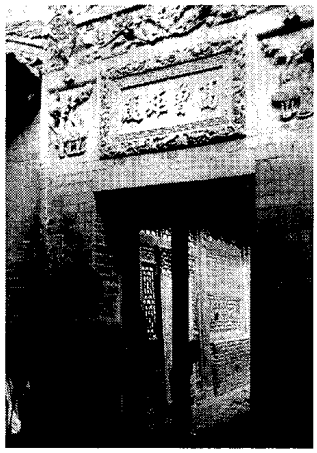
ただ、東西双方の中庭型住宅（建築）は、それぞれ独立に成立し、お互い無関係に発展してきたと認識されてきたように思われる。あらためてそれらの連鎖性をとりあげ、歴史的、地域・民族的に、あるいは形態的に見てどのような関係にあるのだろうか、というのがここで考えてみたい問題なのだが、もちろんこのような問題提起もおそらく多くの人が想定しているはずである。にもかかわらず正面切って議論が進まないのは、東西両域にはさまれた中国西域から中央アジア諸国、つまり

西安市華覚巷回族居住街（1986年撮影）

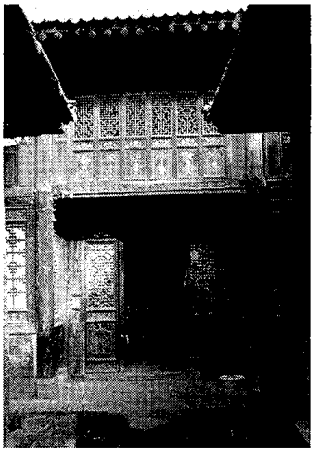
「絲綢之路（シルクロード）」という東西文化の大交流ルートについての十分な調査情報が欠けているからにほかならない。理由としては単純であるが、しかしなかなかに易しくはないことである。もとより小報がこのような大課題に一部でも応えられるものではないが、一、二の見聞にそえて雑考を試みてみたい。

このようなことを考えるようになったのは、二〇〇五年夏に中国新疆ウィグル自治区を旅した時の印象からだが、漠然とした問題意識は二〇年以上も前の一九八六年に陝西省西安市を訪れた際にも感じていた。この旅行は日本建築学会（民家小委員会）の中国民家視察団の尻馬に乗ったもので、右も左もわからぬまま、街で出会う碧眼の西域異民族に目を見はったのを憶えている。この視察旅行では西安城内の鼓楼近くにある華覚巷清真寺（精真寺）と周辺回族居住街の町屋を二、三軒探訪する機会があった。西安の前に北京の四合院を訪れていたので、両者を較べてみての印象ものこっている。

西安の回族町屋は、北京のような大邸宅ではなく、目見当で一〇〇からせいぜい一五〇平方メートルほどの小ぶりの住宅である。鼓楼の上から俯瞰したところでは、院子の四方に房屋を備えた四合院形式ではなく、三合院、二合院が大半のようである。街路側は隔壁だけで、入口門・扉口は特に中軸を外すというわけではなく、入ると直接小さな中庭である。左右の副屋（廂房）は平屋だが、奥の房屋（正房）は



西安市華覚巷回族の町屋　大門から院子へ（1986年撮影）

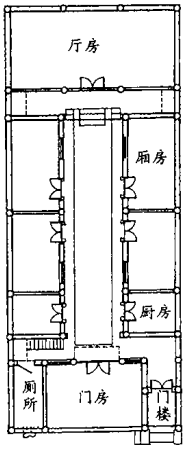


西安市華覚巷回族の町屋　院子（1986年撮影）

二階建てとするのが多いようだ。中庭に面する各房の前面は中国風の格子戸が建てこまれており、見たところでは漢民族の建築と変わらない印象で、先に紹介した江南の中庭＝「天井」型住宅に似ているように思う。緊密度の高い中庭空間のつくり方でいえば、北京四合院とは全く違っていて、むしろ西方アラブ圏に近いとさえいえよう。

西安には八年後（一九九四年）に再訪する機会があって、回族居住街を歩いてみたのだが、だいぶ様相が変わっているようで、前回訪問した町屋はみつけることができなかった。ちなみに『中国民族建築』[*21]第二巻の「陝西篇―民居」には西安城内の町屋については記載がなく、韓城市近傍党家村の住居群と三原県城近傍孟店村の周宅が掲載されていた。党家村の住居は、西安城内回族町屋と非常によく似た中庭型住宅である。図示された「典型四合院」は、西安で拝見したものより整った平面で、街路側前面に「門房」を備え、奥行きも深いが、中庭空間のつくり方は西安と同様のようである。正面扉口「門楼」は右手に中軸をはずしているが、孟店村周宅は正面「大門」を中心軸上に開いている。周宅は非常に奥行きが深く、中庭を「中院」「内院」と二つ連鎖させた邸宅であるが、北京のように緩やかな中庭空間ではなく、やはり緊迫度の高いつくりになっているように思われた。

西安周辺では、もうひとつ半坡遺跡の近くで拝見した窰洞住居が関心をひくのだ



陝西省韓城市党家村典型四合院平面図（王紹周他編写委員会『中国民族建築』（江蘇科学技術出版社、）第2巻）

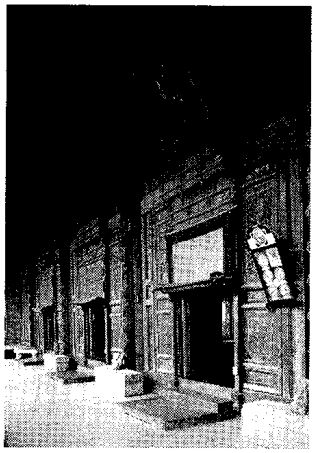
が、残念ながら案内いただいたのは、いわゆる靠山式（横穴式）の窰洞だけであった。窰洞は黄土地盤を刳りぬいてつくった洞窟住居であるが、もうひとつ、平地に深く掘った縦穴を中庭とし、その四周に横穴を掘って部屋をつくる「下沈式」がある。こちらの方は構造方式が煉瓦を積みあげたか地盤を掘ってつくったかの違いがあるだけで、一種の中庭型住宅にほかならない。

西安初訪で清真寺を拝見したことは右にふれた。実をいうとこの初訪時には清真寺を道教寺院かなにかだと思いこんでいて、イスラーム教モスクであると明確には認識していなかった。上の空で説明を聞き逃したのだろうが、実際のところ見たままの形姿では中国の仏教や道教寺院とほとんど変わりないのである。

ともあれ西安清真寺も中庭型建築のひとつとして見ておかなくてはならない。境内は幅五〇メートル、奥行き二五〇メートルと、きわめて奥が深い。総門だけは横から入るのだが、あとは照壁から始まって牌楼、五間楼、石牌坊、二道門、省心楼、連三門、鳳凰亭と中軸線上、左右対称に次から次へと楼門や亭屋が連なり、最奥の大殿に達する。境内全体を高い煉瓦周壁で囲んでおり、特に省心楼のあたりは左右に連なる廂房と相まって、濃密な中庭空間をつくっている。ただ大殿は周壁から離れた独立の堂屋になっていて、中庭型建築のつくりからはずれている。

個々の建築は、四隅をきつく刎ねあげた瓦屋根といい格子をはめた開口部といい、

西安市清真寺鳳凰亭　1392年創建（1994年撮影）



西安市清真寺大殿（1994年撮影）

中国建築そのもののデザインである。しかし気をつけて見れば、中国風の楼閣と見えた省心楼はミナレットにほかならないし、やはり中国風四阿に似た鳳凰亭は、中近東のモスクで定形となっている沐浴用の泉亭、大殿も前面の深い軒下空間はモスクのイーワーン空間にならったものかもしれない。

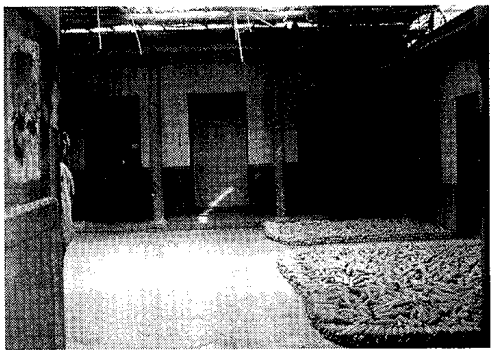
モスク建築が、原理上単純な礼拝空間に徹していて、象徴表現を抑え、固定した様式にこだわらないところがあると思うが、[*22] ここでも見事に中国建築の伝統に溶けこんでいるのである。西安清真寺のような建築のあり方には、西方の建築と東方のそれとが、複雑に影響しあう様相を見ることができるわけで、回族中庭型住宅も、単純に漢族固有の四合院住宅、あるいはそのヴァリエーションではすまされないはずであろう。

西安についての筆者の見聞は右で尽きる。

甘粛、新彊の中庭型建築

一九九四年の旅行では敦煌まで足をのばした。主眼はもちろん莫高窟だが、「西へ出れば故人無からん」と詠われたタリム大砂漠を眺めたくて陽関を訪れた。遺跡の入口にあたるところにオアシス集落があった。村の名は南湖鎮というそうである。

甘粛省南湖鎮　陽関遺跡入口のオアシス集落（1994年撮影）



甘粛省南湖鎮　農家の中庭（1994年撮影）

最初何であるかわからなかったのだが、隙間をあけて煉瓦を積んだ小屋が目をひいた。干しぶどうをつくるのである。この後トルファンではたくさん見ることになる。

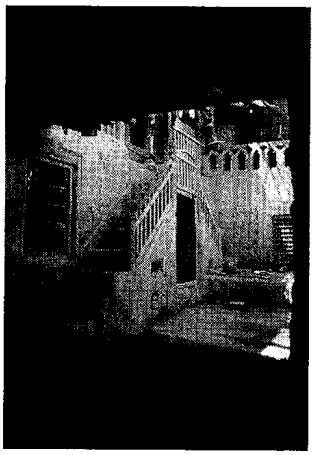
村は小さな農家集落であるが、街路に沿って入口扉があるだけの壁が連続する、まことに閉鎖的なつくりである。興味をひかれて一、二軒覗かせてもらった。街路沿いは房屋がなく外壁だけという、三合院形式の住宅であった。中庭型住宅は常にそうだが、扉一枚を隔てただけの内外空間が鋭い対比をみせる。別世界なのである。ここはオアシスそのものが小さく、すぐそこまで流砂が押し寄せる砂漠の中の点のような存在にすぎない。そこから扉をあけて入った中庭では、トウモロコシをひろげ干しているところだったが、びっくりするほどきれに整頓されている。質素ではあるが安寧に満ちた空間、砂漠のなかのパラダイスである。中庭型住宅が求められる最も切実な理由、外界からの防御性が、痛いほどに理解できるのである。

砂漠のシルクロードは入口くらいでいったんは満足していたのだが、一〇年ほどたった二〇〇五年夏、さらに新疆ウィグル自治区の西端まで出かけることになった。これも格別の目的があったわけではない。

最初に訪れたのがトルファン、ここまで来るとさすがに漢文化圏ははるかに遠く、清真寺＝モスクのデザインも中央アジアの延長上にある。蘇公塔（スーゴンター）は一八世紀に建てられたミナレットで、上すぼまりの特有の形をした円筒形はひろく中央アジアでお

なじみである。モスク本体も修復されていたが、方形中庭に設けられた礼拝室は木柱を建てならべた大ホール形で、基本形式は中近東まで共通のものといってよい。

トルファン西郊の高昌故城、火炎山見物がてら、吐峪溝まで足をのばしたのだが、昼食時古い集落で一服した。密集する日乾し煉瓦造家屋はやはり中庭型住宅だったが、あまり緊密な空間をつくっているように見えず、ちょっと覗いただけで失礼した。



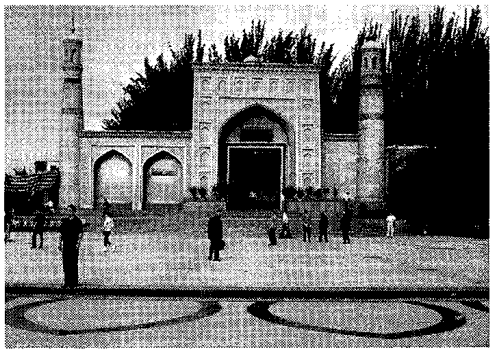
新疆ウィグル自治区トルファン東郊吐峪溝の中庭型農家（2005年撮影）

新疆ウィグル自治区交河故城居住街区（2005年撮影）

思いがけず興味をひかれたのは交河故城である。高昌国時代はともかく、手元のガイドブックに唐代以降の遺跡と説明があっただけでさっぱり要領を得ない見学だったのだが、まるで巨大な戦艦のように屹立する岩山上につくられた姿が印象的だった。仏寺遺跡なども素人の想像力を刺激する程度にはよくのこっている。居住街区を歩いていて空想をめぐらした。遺存するのは家屋の脚部だけであろうが、見たところ壁体などは足元の岩盤を刳りだしたもののようである。ひょっとするとこの都市は、一部は日乾し煉瓦を積むにしても、全体として岩山を刳りぬいてつくったのではないだろうか。岩質は砂岩あるいは石灰質で柔らかそうに見える。

居住街区のなかで、「官吏住居跡」という比較的保存状態のよいところを見学させてくれる。歩いてきた街路から階段を一階分ほど下りたところが、この住居の主床面である。街路からいえば地階であるが、おそらく中庭で、その四周に横穴をほ

交河故城「官吏住居跡」　街路から１階分下りたところが主床面の中庭（2005年撮影）



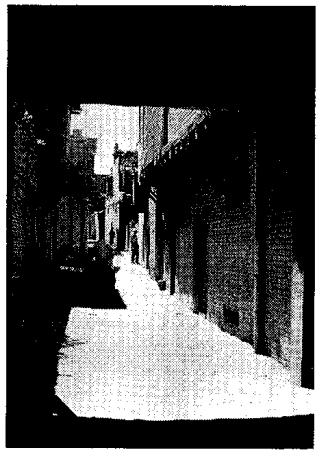
新彊ウィグル自治区カシュガル市　エイティカール大モスク　1798年以降拡張（2005年撮影）

りこんで部屋にしているのである。「下沈式」窰洞形式の中庭型住宅にほかならない。刳りぬいたつくりはともかくとして、起伏のある地形に中庭型住宅を密集させてつくった都市のように推定できる。すぐに想像が飛躍したのはモロッコの城塞都市（クサール）であるが、このあと訪れたカシュガル老城が交河故城によく似たつくりになっていた。

カシュガルは新彊の西端、シルクロードの枢要結節点に位置するオアシス都市である。もう数一〇キロも往くとカラコルム高地越えでキルギスやタジキスタン、パキスタンへ入る。

都市構造も旧状をよくのこしているのではないかと思う。エイティカール大モスクと広場は、そのまま現在の繁華街、都心部を占めている。モスクは一八世紀末以降に拡張された姿で、正面一四〇メートル、奥行き一二〇メートルの壮大な方形中庭を構え、中庭西奥に木造列柱ホール形式の礼拝室を設けている。

このモスクの裏手周辺は職人街、モスク前広場から東へ繁華街が延びている。商店街としてはかなり近代化されているようで、元来のスークの猥雑な雰囲気は薄れているが、そのすぐ裏手には旧来の居住区がひろがっている。モロッコで体験したほどではないが、細い街路が曲がりくねって迷路をなしている。辻々にはかなりの頻度で小さなモスクが設けられていた。家屋はおおむね二階建て、中庭型住宅特有の閉鎖的な家並みだが、二階には張り出し窓を設けるものが多いし、街路上を橋の



カシュガル市　中心市街裏手旧市街（2005年撮影）

カシュガル市　中心市街裏手旧市街の住宅中庭（2005年撮影）

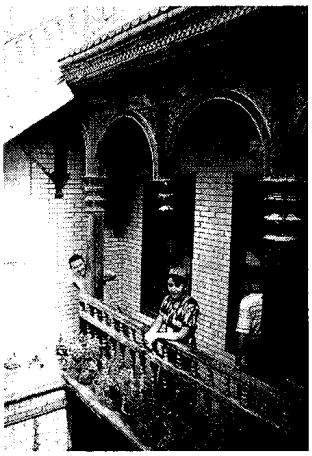
ように横断するものもみられた。

家々の扉脇に「文物〇〇号」と小さな金属プレートを留めているものがたくさんあった。文化財として保存対象になっているらしい。案内を乞うて二、三軒お邪魔させていただいた。ウィグル人は人なつっこい。中庭くらいを覗くつもりが、たちまち露台へ、さらに居間のなかへと招き入れられてしまった。居間の中は床の奥過半を数十センチ高くしたものが多い。中国北方域でおなじみの炕（カン）で、立派な絨毯を敷き詰めている。夏季の酷暑からは想像しづらいが、冬は寒いところなのであろう。室内で目をひくのは壁一面にひろがる石膏の組花装飾と大小の壁龕で、部屋中が華やかに彩られている。

主要市街地の東辺には吐曼河が流れているが、その東対岸にも小丘を占めるようにした、もうひとつの老城＝旧市街があって、あるいは半独立の城塞都市をなしていたのかもしれない。こちらは老城全体が保存街区になっているようで、入口で「入場料」を払い、ガイドがついて案内してくれる。

こちらではいくつもの家々が門戸を開けて観光客を中へ入れてくれる。中庭にしつらえた小さな店棚で土産物を売っていたり、楽器や陶器などの工房を覗かせてくれるところもあった。中庭型住宅であることは、中心市街側の居住区と変わりないが、地形の起伏がかなり強く、家によっては街路から入ったところが二階、三階で、

カシュガル市　中心市街裏手旧市街の住宅中庭（2005年撮影）



カシュガル市　吐曼河東対岸老城の住宅中庭（2005年撮影）

いきなり中庭を見下ろすような入り方をするものもある。地盤を掘り下げているところは下沈式窰洞と同じだし、空間体験としてはまことに楽しい。住居のつくりとしても、上下左右にダイナミックな空間がひろがって、多彩な生活が営まれているのであろう。

あとで後悔したことだが、カシュガル民居の基本的な特色としてあげられている「阿以旺（アイワン）」を見損なってしまった。アイワンというのは吹き抜けの空間で、周囲の屋根より高くした小屋根をかけ、高窓から採光するようになっている。もとの姿は、江南民居で紹介した「天井」に似て、縦に深い中庭の一種だったと思う。中庭と同様、アイワンを中心としてそのまわりに諸室を配置するのである。強い陽射しと砂嵐を避けるために、屋根をかけるようになったものであろう。

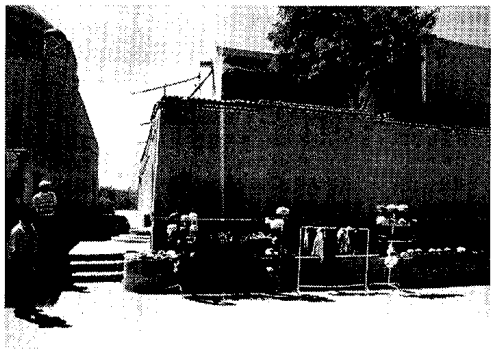
結びにかえて

シルクロードはカシュガルからさらに西へ延びる。新疆行の翌々二〇〇七年夏、ウズベキスタンなど中央アジア五カ国を周遊する旅へ出かけた。遺跡めぐりの観光ツアーに便乗したまでで、表題に適うような見聞はほとんど得られなかった。なによりも訪れた各地の主要都市の大半が、ロシア統治期に大きく変貌していたためで

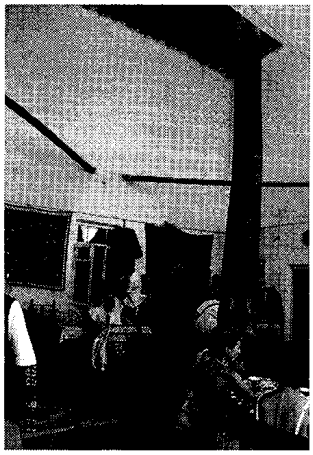
もある。ロシア人の都市づくりに中庭型都市住宅の文化は期待できそうもない。サマルカンドやブハラには淡い期待を抱いていたのだが、その期待も裏切られた。確かに壮麗なモスクや霊廟、マドラッサなど旧都心部の歴史遺産は見事にのこされているが、そういう歴史遺産群を一歩出ると、これも見事といいたくなるほど徹底的に「近代化」＝ロシア化された市街に一変するのである。

それでも中庭に住まう伝統はまだ生き生きとのこっていて、ツアー一行が立ち寄るようなレストランも、ほとんどが中庭型にできている。少し大型の住宅プランと変わりないのである。おそらく新しく建てかえられた低層タイプの庶民住宅にも、中庭の伝統は活かされているのではないかと想像できる。ただ、こういうところは、しかるべき目的をもった調査行でなければ、ちょっと覗いてみるというわけにはいかないのである。

この旅行の最西端は西ウズベキスタンの旧都ヒヴァであった。一八世紀の旧市街を一式保存しており、余裕があれば中心部をはずれたところで庶民の都市住宅を訪ねることができたかもしれないが、酷暑に当てられて伸びてしまっていた。昼食をとったレストランがややそれに近く、中層程度の都市住宅の一部を食堂にしていた。われわれが座ったところは中庭と主室、もともと接客にあてられるところである。中庭の南側、つまり陽射しのあたらない北向きのところが、吹き放しのベランダの



ヒヴァ（ウズベキスタン） レストランに使われている中庭型住宅（2007年撮影）



ヒヴァ 中庭型住宅 中庭南側に陽射しを避けて設けられたイーワーン（2007年撮影）

ようになった特等席である。ここは「イーワーン」と呼ばれる。ヒヴァの王宮でも、壮麗さでは別世界だが、中庭に北面してイーワーンが設けられていた。謁見の間であったり、要するに宮殿内の最上席なのである。形式は庶民の中庭型都市住宅とまったく同じであった。

イーワーンは、モスクで中庭周壁の一部にオープンな窪みをつくり、ひときわ目立つモニュメンタルなアーチをかけたところをいう。住宅でもひろくいわれる空間名だという。[*23] 右にふれたカシュガルの「アイワン」は同じ言葉の訛であろうか。空間の形式はかなり異なるが、住宅プランの要を占める位置では共通するように思われる。

東西の中庭型建築文化を連続させて考えたい、そのためには双方をつなぐユーラシア内陸部の大文化交流路、シルクロード沿いの知見が不可欠ではないだろうか、というのが本稿の言いたいことのすべてである。この場合、どちらかが発祥の地で他方へ文化伝承した、というたぐいの問題設定は好奇心の対象ではあっても、生産的なものではない。中庭型建築はきわめて普遍的な、いわば住文化の原理のようなものであって、文化伝搬の重なりのなかで多彩な地域的な特色を編み出しているのである。そういう地域的な特色を明らかにしていく、という作業が豊かな実りのために必要とされるのであろう。こうした作業は既に東西双方で積み重ねられている。

これに双方間をつなぐ知見を加えることができれば、はるかにダイナミックな考察が展開するのではないか、というのが本稿の期待するところである。

観光旅行の片手間でしかない本稿のような雑考がかかわるレベルの問題ではなく、きちんとした目的を設定した調査研究が求められるのはいうまでもない。実は筆者のまわりでもこういう実地調査が構想されている。まだごく粗い見通ししか立てられないが、例えば本稿中でも暗示したように、案外西安市そのものが重要な調査地の第一にあげられるのかもしれないと思っているし、西安を出て河西回廊沿いに敦煌へ到る諸都市についても、調査情報はまだ乏しいようである。新彊のオアシス都市は多くが「近代化」してしまっており、都市周辺部や農村部の調査も必要なように思える。とこれは老年の夢かもしれないが、ぜひ近年中に実現しないものかと考えている。

註

＊1 取りあげたのは大半が住宅なのだが、一部モスクや宗廟などにも言及するので、用語を中庭型「建築」とした。あまり厳密に使い分けるつもりはなく、随時中庭形「住宅」も使っていく。なお中庭型住宅を建築分野では「コートハウス」というが、英語としては必ずしも熟していないようで、一般の辞典は裁判所といった語意しか示していない。「中庭」もこの場合、ヨーロッパ圏なら英語のcourtより、スペイン語のpatioがぴったりくる。

＊2 例えば中尾佐助『現代文明ふたつの源流』（朝日選書、一九七八）は、世界の民家を外庭型（ニグロ―ニッポン型）と内庭型（カスバ―ホートン型）に大分類していた。

＊3 日本で発達した伝統的町屋は中庭型住宅のヴァリエーションと考えることができる。しかし、かつて建築学科の学生に中庭型住宅を設計課題に出した体験では、最初かなりの数の学生がとまどっていた。

＊4 陣内秀信「住宅と住宅地」（陣内秀信・新井勇治編『イスラーム世界の都市空間』法政大学出版局、二〇〇二・一〇）。

＊5 マラケシュ旧市街のムーサン街区は約一五〇メートル四方ほどの地積、戸数は一五〇戸ほどとのことだから、密度としてはヘクタール当たり六〇戸ほど（一戸当たりの平均敷地面積は、一二〇～一三〇平方メートル前後）と概算できる。この密度は四～五階建ての中層住居地に相当する。一戸当たり居住家族数がわからないので比較は難しいが、仮に一戸八人として（現状はもっと少ないように観察された）ヘクタール当たり五〇〇人程度、バグダードはその二倍と計算できる。高層のそれも相当に高密度な住居地に匹敵する。

＊6 前出陣内秀信「住宅と住宅地」。環境装置としての利点は、中庭に発生する上昇気流が周囲の冷気を呼びこむ効果をさす。興味深いことに日本の伝統的な町屋でもよく似た効果が指摘されている。最後の社会的理由は、イスラーム圏の中庭型住宅は外観が同一で、平等につくられることを指す。

＊7 この地帯はおおむね乾燥地帯である。中庭を使う上では小雨乾燥気候が有利だから、一般に中庭型住宅の成立条件に乾燥気候があげられ、例えば日本では不向きな住居形式とされるのだが、後でふれるように、中国江南地方の事例はこれに反するようである。

＊8 法政大学大学院陣内秀信教授らの「エコ地域デザイン研究所」、同高村雅彦助教授らの「アジアまち居住研究会」は、中国を含むアジア圏の都市、住居を視野にいれて総合的な研究を進めている。陣内秀信他『北京—都市空間を読む』（鹿島出版会、一九九八・二）など。

＊9 「四合院」という呼称は比較的新しく、清代には「四合房」はあるが、一九五〇年代まで「四合院」は見られないという（田村広子「中国華北の四合院　北京・平遥の明清住宅」『アジア遊学第八〇号　特集アジアの都市住宅』二〇〇五・一〇）。

＊10 藤堂明保『漢和大辞典』（学習研究社）によれば「胡同（フートン）」は「中国北方で、横町や小路のこと。もと蒙古語を音訳した」というが、西域文化を暗示するようで気にかかるところである。

＊11 大門を中軸をはずして東南隅に開くのは風水学説の影響とされる。

＊12 元代の帝都北京時から、一戸主あたりの宅地は八畝（およそ間口七〇メートル四方）とされた。現在でもこれを基本として二分した間口三五メートル×奥行き七〇メートルほどが典型的な邸宅規模だという。マラケシュと比較すれば、密度は二〇分の一以下ということになる。前出田村「中国華北の四合院」

＊13 例えば「華北に住む漢族の民居は北京の内庭型住居—四合院に代表される」（茂木計一郎「中国民居　「院子」と「堂」のひろがり」（茂木他東京芸術大学中国住居研究グループ『中国民居の空間を探る』建築資料研究社、一九九一・四）とか、「（四合院のような）閉鎖中庭型の屋敷構えは……漢「文明」の指標的存在である……漢民族の居住領域と閉鎖中庭型住居の分布はほぼ重なりあい……」（日本建築学会編『東洋建築史図集』（彰国社、一九九五・七）の浅川滋男「解説」）とされている。

＊14 前出茂木「中国民居　「院子」と「堂」のひろがり」

＊15 その他管見を加えるなら、一九八六年四川省成都近郊で訪ねた農家は「二合院」で、日本の民家になぞらえて「曲屋」だと理解していたが、帰路空港を飛びたった上空から、いくつもの二合院、三合院が密集する農村集落が見えたのを憶えている。

＊16 塩谷壽寿『「異文化としての家　住まいの人類学事始め」（圓津喜屋、二〇〇二・一）が、大理地方白族の住宅を報告している。

＊17 前出『中国民居の空間を探る』
＊18 高村雅彦『中国江南の都市とくらし　水のまちの環境形成』（山川出版社、二〇〇〇・一二）
＊19 前出高村『中国江南の都市とくらし』
＊20 藤堂『漢和大字典』には「天井　テンセイ　③穴居住宅の明かりとりの間。上部を四角くあけてある」とある。茂木、高村は中庭＝「天井」を江南ないし中国南部の言い方としているようであるが、鈴木解雄は陝西省窰洞で聞き取った「天井」を報告している。鈴木によれば、藤堂明保はやはり陝西省で「天井」を見ているという。鈴木解雄『中国の天井＝テンチンと住居』（私家版、一九八八・五）。

「天井」についての茂木、高村の説明を略記しておく。

「……深く狭い「天井」が置かれる。「天井」は諸室を配置統合する生活的中心であり、内部空間を緊張させる造形的中心となる光庭である。……「天井」の言葉は、……北の四合院住居の院子とは形だけでなく発生においても異なるものと思う。中庭を「天井」と呼ぶ地域は華中・華南において広く存在する」（前出茂木他『中国民居の空間を探る』）

「中国の南方で中庭を意味する「天井」の語源については、さまざまな説がある。……二階の建物が周囲をかこい、中庭がより閉鎖性を増して、天から見ると井戸のように見えるからだともいわれる。さらに長い庇が中庭に覆いかぶさって、天窓のような性格を帯び、水ではなく天の光が溜まるところという意味からこのように呼称されるともいう」（前出高村『中国江南の都市とくらし』）

＊21 王紹周他編写委員会『中国民族建築（全五巻）』（江蘇科学技術出版社、一九九八・八～九九・一二）第二巻の「陝西篇」には「村落」（＝先史遺跡）や宮殿、寺院、陵墓などが記載されているが、「民居」はこの二例のみである。

＊22 『風と大地と』でもふれたが、例えばトルコのモスクは周知のようにキリスト教建築であるビザンチン様式を踏襲しているし、インドネシアでは同国の民族的な建築様式やヒンドゥー教寺院の様式を取りこんでいる。

＊23 前出『イスラーム世界の都市空間』巻末の用語解説を引いておく。

「イーワーン（ア＝アラブ地域）、エイヴァン（ト＝トルコ地域）、リヴァン（ト）、イーヴァーン（ペ＝イラ

ン地域)、リワーク(ア)、ターラール(ア・ペ) 中庭に面し、屋根をかけ、太陽を背にするように大きく中庭に開いた半戸外空間。主に夏に使われ、庭との境に柱があるタイプと、柱がなくアーチで区切られているタイプがあり、呼び名が異なる。その形態の発祥はメソポタミア、ペルシャ地域とされる。」